

認知社会ネットワーク

ーその可能性の中心ー

大西康雄
(山梨県立女子短期大学)

『社会学論考』 第 13 号 (東京都立大学社会学研究会)
69-86 頁, 1992 年 5 月

認知社会ネットワーク ～その可能性の中心～

大 西 康 雄

1. 認知社会ネットワークとは何か

1. 1 従来の社会ネットワークと認知社会ネットワークの相違点

従来の社会ネットワーク分析は、調査対象者に対して、彼（女）が持つ個人的ネットワーク、すなわち、本人が別の他者と直接取り結ぶ社会関係を申告してもらいそれに基づいてさまざまな分析を行ってきた。すなわち対象者本人が直接持つと申告した社会関係ネットワーク（一次スター）を集計、集約して全体ネットワークを構成しそれを分析の材料として使用してきた。ということは、一次スターネットワークそれ自体は、対象者の認知に基づくものではあるが、しかしそれを研究者が構成した全体ネットワークが内包する種々の構造情報（ネットワークの配置パターン等々）は、厳密には対象者の認知の結果そのものではない。⁽¹⁾

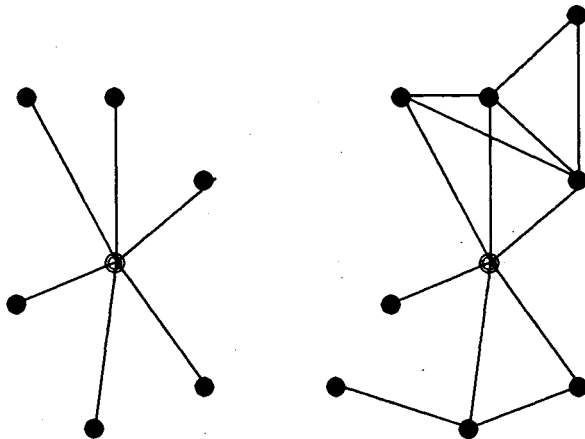
それに対し、認知社会ネットワーク(Cognitive social networks)とは、対象者自身の当該社会全体に関する認知マップをネットワークデータとして採集していくものである。以下、認知社会ネットワークに最初に着目した、Krackhardt (1987) の認知社会ネットワーク分析を紹介しよう。

まず、調査対象者から収集されるデータに関していえば、通常社会ネットワークが回答者の一次スターを調べるのに対し、認知社会ネットワークの場合、回答者に対して、回答者が直接持つ関係のみならず、調査対象集団の中でその成員相互間にどのように社会関係が存在する（と回答者が認識している）かを尋ねる。（図1参照）その場合、通常社会ネットワーク分析で収集したデータを研究者がマトリックスに構成して扱う場合、対象者がN人であるとすれば、 $N \times (N -$

1) 人の社会関係マトリックスの形(つまり、指名者と被指名者の間に関係がある場合に1、関係がない場合に0を入れたマトリックス)で使用するのに対し、Krackhardtの場合は認知社会ネットワークを $N \times (N-1) \times N$ の3次元マトリックスの形に一旦構成する。つまり、調査対象者から見た全体ネットワーク $N \times (N-1)$ が、調査対象者数(N 個)分存在する、そういった3次元マトリックスということである。

この時、この3次元マトリックス全体を R とおき、申告者を k 、申告者が認知した指名者を i 、申告者が認知した被指名者を j とすると、 k から見た、 i と j との関係は、 $r_{i,j,k}$ (但し $i \neq j$)で表わされる。もし k が i と j との間に関係が存在すると認知すれば $r_{i,j,k}=1$ となり、 k が i と j との間に関係が存在しないと申告すれば、 $r_{i,j,k}=0$ となる。

図1 通常の社会ネットワークで収集されるデータと、
認知社会ネットワークデータで収集されるデータの相違



従来社会ネットワーク分析で
対象者から収集してきたデータ
(◎は回答者本人)

認知社会ネットワークで
対象者から収集するデータ
(◎は回答者本人)

Krackhardtの認知社会ネットワーク分析

ここでKrackhardt(1987)の認知社会ネットワークの分析手法について紹介しておこう。

上記のような形で得られた3次元認知社会ネットワークを、Krackhardtは分析のために一旦2次元マトリックスに集計し直している。そのための方法として次の三つの方法を彼は指摘している。

(1) 個人認知ネットワーク構造(Slices) : ある回答者 k が認知、申告した集団内全成員相互間のネットワーク。つまり k 個人の認知社会ネットワークの回答データのことである。

(2) 局地集計ネットワーク構造(Locally aggregated structures) : 各回答者 k が申告した自己の1次スターのネットワークを全回答者について集計したもの。要するに従来からある社会ネットワークの集計に同じである。

(3) 共通認知ネットワーク構造(Consensus structures) : 認知社会ネットワークを i, j について集計し、一定数以上の回答者 k によって認知された(Krackhardt の場合、基準を50%以上の回答者による認知としている) i, j 間の関係のネットワークを共通認知ネットワークとする。つまり、50%以上の回答者が i, j 間に関係があると認知したときに $r_{i,j}$ (i, j 間の共通に認知された関係) $= 1$ とし、それに満たない場合は $r_{i,j} = 0$ とする。

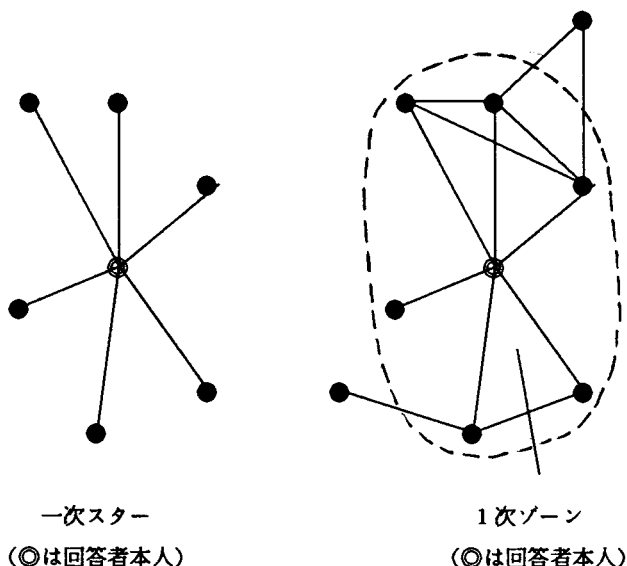
認知社会ネットワークデータの意味

通常の社会ネットワーク分析では各対象者にとっての1次スター情報自体は本人の認知に基づくものであっても、それらが研究者の手によって集計、集約された時点で、そこで扱われる関係ネットワークマトリックスの内包する構造情報は、しばしば研究者によって構成されたものとなる。例えば、ネットワーク上のある行為者に着目し、その行為者の行為を行為者を取り巻くネットワークのパターンから説明しようとするとき、一次スターのパターンから説明する限りでは、研究者と対象者が同じ地平に立っているといえるだろう。しかし、説明すべきネットワークの範囲を1次ゾーン(対象者と、彼が付き合いを持つ人々との関係に加えて、彼に関係のある者どうしの関係も加えたネットワーク)にまで広げて当該行為者を説明しようすると、そこにはすでに回答者が申告していない関係が含ま

れている。もちろん回答者が回答していないということは、単に直接回答者本人が持っているわけではない関係について答えることを求められなかったということにすぎず、その種の関係について回答者は認知しているかもしれない。しかし、認知していない可能性も残されている。いずれにせよ、対象者本人が、この種の関係、さらにいえば、「間接性」をどう認知しているかは、通常の社会ネットワーク分析では、必ずしも問題にされてこなかったということを指摘しておきたい。

これに対し、認知社会ネットワークの場合を考えてみよう。回答者 k にとっての認知社会ネットワークのマトリックスを R_k とすると、かかる R_k の内包する構造情報（ネットワークのボタン等）は、完全に各回答者 k の認知（少なくとも申告）に基づくものであるということである。そして、この構造情報は、回答者 k にとっての全体認知マップ、更に言い換えれば、 k の世界認知のある種のコンテキストの反映であると思われる。いわば、回答者の世界認知マップをネットワーク上で表現したもの、それが認知社会ネットワークなのではないだろうか。そ

図2 1次ゾーンと、1次スター



うだとすれば、認知社会ネットワークの3次元マトリックス（つまり、各回答者の2次元認知社会ネットワークマトリックス×回答者数の3次元マトリックス）R全体は、これら回答者各々の世界認知のコンテキストの総計であるとひとまず括ることができる。⁽³⁾

このように、Krackhardtの業績は、認知ネットワークという新たな切り口の中に、従来の社会ネットワーク分析が扱ってきた社会ネットワークを位置付け直した点にある。

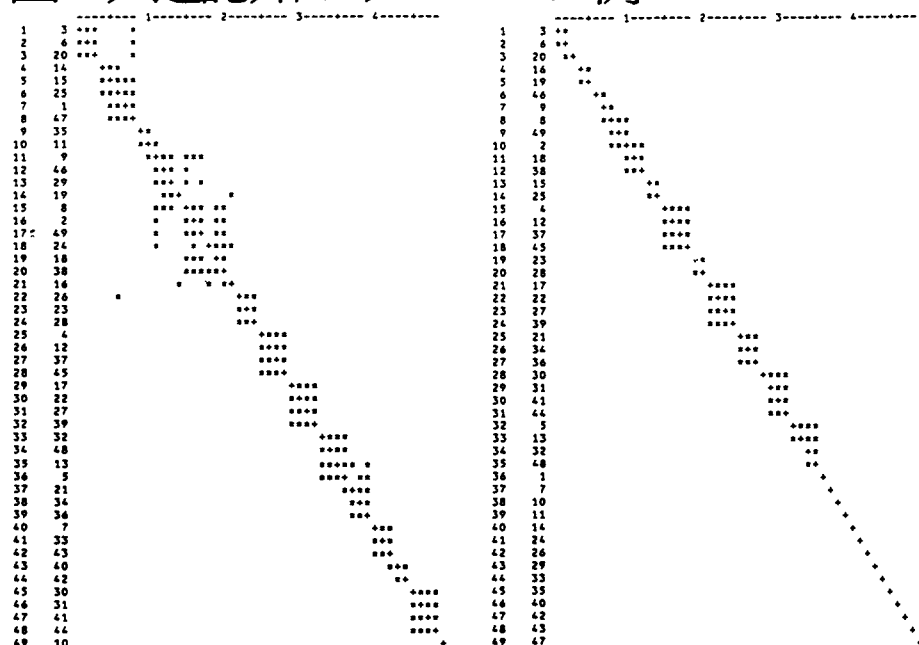
元々Krackhardtの認知社会ネットワークへの関心は、社会ネットワークデータを収集する際に、どのようにして回答者が回答するデータの確実性、客観性をデータ内在的に確保していくかという点から出発したので、⁽⁴⁾彼の議論は、当然共通認知ネットワーク構造へと向けられていくのである。しかし彼の議論を認める場合でも、50%の基準は絶対化されるべきではないだろうし、またそれによって得られた結果を実体化して（例えば唯一の共同主観的認知マップとして捉える等）考えるべきではないだろう。このような方法を分析手法として認めるならば、認知割合によって様々に変化する共通認知ネットワークパターンの、変化パターン、変化構造自体（つまり、ある認知割合に着目したときの当該共通認知ネットワークのマトリックスを1つの構造だとすると、その1種のメタ構造といえるが）、ネットワーク構造の構成要素の一つとして考慮すべきであろう。

1. 2 認知社会ネットワークの具体例

ここで、具体的な事例を見てみたい。筆者等は、1989年にある都立高校の1クラス（47名）で認知社会ネットワークデータを収集し分析を行なった。⁽⁴⁾

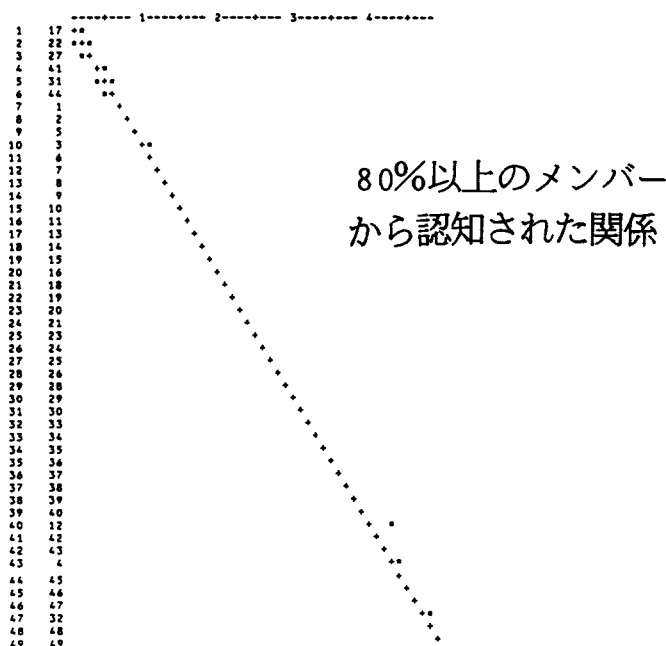
回答者にはまず回答者本人が文化祭で協力関係を持ちたいと思われる友人関係を答えてもらった（5名以内）。次に、本人を除くクラス内のクラスメート同士が文化祭の際にどのような協力関係を取り結ぶと思われるかを予想してもらい、その関係をクラスメート一人当たり5名以内で回答してもらった。それに基づいて作成した、共通認知ネットワーク、並びに、個人認知ネットワークの例がそれぞれ、図3、図4である。これらの図は、いずれもわかりやすくするためにne

図3 共通認知ネットワーク例



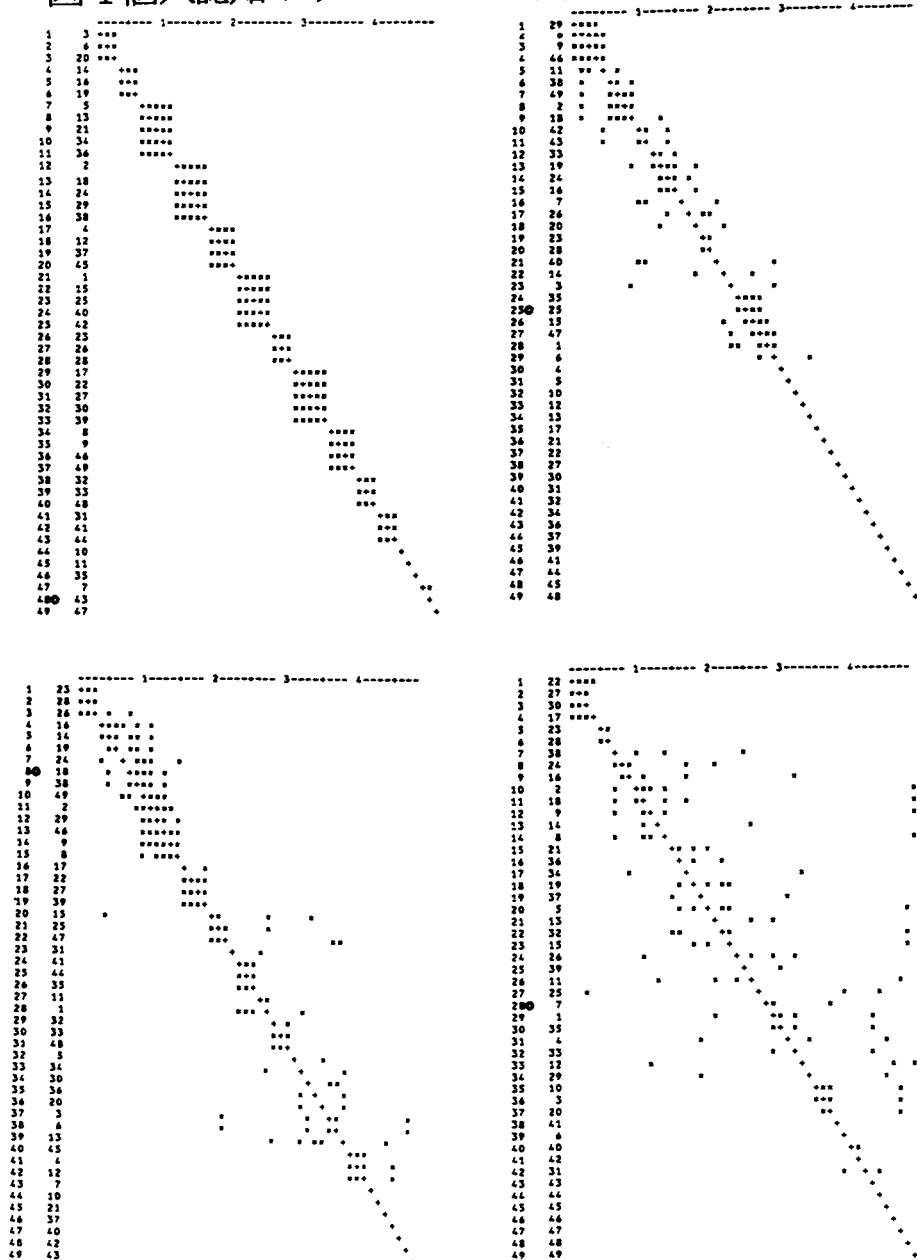
20%以上のメンバーから
認知された関係

50%以上のメンバーから
認知された関係



80%以上のメンバー
から認知された関係

図4 個人認知ネットワークの代表的パターン例



◎は、回答者本人の位置

g o p y 分析にかけてある。(6)

個人認知ネットワーク図を見てみると、コンテキスト認知に一定のパターンがあることがわかる。一つは、グループが分散して存在している不連続型と、つながっている連続型の違い。もう一つは、ネットワークが比較的複雑に縦横に走る循環型と、一方向型の非循環型である。これらは、社会コンテキスト認知についてのパターンがあることを伺わせ、そして、それらの認知のパターンがあるいは、彼らの付き合いかた、行為のしかたにも影響を及ぼしている可能性を残しているように思われる。

1. 3 認知社会ネットワークが社会ネットワーク分析に提起するもの

このような、社会認知ネットワーク分析の提案は、社会ネットワーク分析に新たな可能性を付け加える。社会ネットワーク分析が、社会ネットワークという手段を用いて明らかにしようとしているのはある種の「構造」である。従って、社会ネットワーク分析とは、その意味では、「構造」分析の中の一分析手法と位置付けられる。(6) この構造には取り敢えず2つの種類の構造を指摘することができるように思われる。

1つの目の構造は、山岸が指摘した(7)、ネットワークを構成する主体を「外的」に制約する、主体に関りなく存在する構造である。この構造とは、例えば、客観的に(主体に外的に)存在する社会ネットワークの構成経路といったものである。このとき問題にされるのは、かかる構造が、当該ネットワークの構成員に知覚されているかいないかにかかわらず、(むしろ構成員に知覚されていないが故により分析上明瞭に取り出されうる)構成員の社会的行為や、その投企の結果にたいして与える影響である。そこで問題にされているのは、いうならば、ある種の外的構造効果といえよう。そして、このような情報を記述、分析していくためには、従来の社会ネットワーク分析で十分であろう。かかる構造は研究者によるきわめて分析的構成的な概念であることに注意を払いたい。

構造分析において筆者がより重要だと考えるのは2番目の構造である。この構造とは、いうならば、主体(研究者から見れば対象者)によって構成される構造情報(構造の型に関する情報)であり、主体にとっての世界(環境)の認知マッ

ブである。その様な主体によって構成された構造情報なり認知マップは、主体が第2者を通じて間接的に情報を収集し、集約、構成していくという意味において、間接情報と呼ぶものである。そして、このような形で主体が、世界（環境）に対する関わり合いを持つ図式自体を「間接性」ないしは、「第3者性」と指定する。このような間接性、第3者性ないし認知マップを把握する手段として、認知社会ネットワーク分析が位置づけられるのである。

構造分析＝社会ネットワーク分析以前の段階において、第3者性とは、G H Meadの「一般化された他者」（役割）から引き出されるような抽象化されたコンテキストとしての第3者性、わかりやすい言葉で置き換えれば「世間」といったもの、として扱われてきた。それらは、あくまで抽象的、一般的な役割概念としての「一般化された他者」や抽象化された第3者性なのだから、背後にあるはずの具体的な社会構造は問題にされようがない。しかし、その様に抽象化される前により個別的に把握されうる第3者性があるはずである。例えば、場の雰囲気、うわさ、日常的な言葉の中で使われる、「状況」判断を行うところの「場の状況」、あるいは、自分の住まう世界の鳥瞰図としての「状況」の認知マップといったものである。これこそが、上で述べた主体によって構成された構造情報であり、認知マップなのである。そして、構造効果の多くの部分は、実質的には、1番目に述べた構造よりも、こちらのほうで多くの部分が説明可能なように思われる。(8)

こういった個々の「場の雰囲気」といったものは、ある程度の部分2者関係性（社会ネットワーク上では、1次スターまでのネットワークとして操作的に指定されえよう）に帰することができるではあろうが、それらが常に状況化し決して均衡に達しないのは、基本的にはそれが間接情報、つまり第2者を通じて得られる第3者の情報に基づき、あるいは、第2者の状況化を通じて、主体が判断する全体世界のイメージ情報、ないしは全体世界のモデルであるからではないのだろうか。ただし、これらは環境の不確定性を縮減するために構成されるのであるが、完全情報を得ることは不可能なので、常に不確定性の余地を残す。その意味でもイメージ情報でしかありえない。そしてこれらが形成されるとき、間接性の構造は決定的に重要な役割を果たすはずであるし、この構造が変わってくれば、他の条件が同じであっても、間接情報の内容が大幅に異なってくるように思われる。

そして、ある主体が構成した間接情報は、認知社会ネットワークでは、Krack-

hardtがいうところの slices=個人認知ネットワークとして表現されるであろうし、間接性自体は、認知社会ネットワークの3次元のマトリックスとして操作的に描くことが可能なのではないか。

前者の構造にせよ、後者の構造にせよ、構造効果をもたらす個別的な構造を分析していく可能性は、構造分析の技法としての社会ネットワーク分析が発明されるまでは、存在していなかった。従って、我々は抽象的な構造を立てることで満足せざるを得なかったのである。機能分析が一世を風靡したのも部分的にはそれが一因であったのかもしれない。もっとも、社会ネットワーク分析以前であっても、社会階級といった、ある種「個別具体的」な「構造」概念も存在した。しかし、そこでの「構造」は、構造情報自体が問題にされたわけではないという意味において、実質的には属性分析の手段であったのである。(9)

社会ネットワーク分析は、このように社会構造分析に新たな地平を拓いたのであるが、すなわち、属性分析ではない構造分析の可能性をもたらしたのであるが、しかし未だ多くの課題を抱えている。今、筆者は、上で構造概念を2つに分類してみた。しかし、従来の社会ネットワーク分析にあっては、この2つの区分は十分に自覚されてこなかったように思われる。

Krackhardt自身は、認知社会ネットワーク分析を社会ネットワーク分析技法の一つの興味深い試みとしてしか扱っていなかったため、認知社会ネットワーク分析研究の意義付けについて、どこまで自覚していたかはわからない。しかしながら彼が認知社会ネットワークという概念を提出してこなければ、このような問題を考えていく手掛りは得られなかった。その意味では、彼の業績は、高く評価されるべきであろう。

(注)

- (1) ちなみに、このような構造情報は、後に論ずる間接性の1つと考えられる。
- (2) ただし、その集約のしかたによっては(例えば、Krackhardtの行った、共通認知社会ネットワークへの集約など)、通常社会ネットワーク分析と同じ問題を抱える可能性があることは、指摘しておきたい。

(3) 元々Krackhardtの認知社会ネットワークへの関心の出発点は、次のようなものであった。従来の社会的ネットワーク分析は、調査対象者に対して、彼（女）が持つ個人的ネットワーク、すなわち、本人が別の他者と直接取り結ぶ社会関係を申告してもらいそれに基づいてさまざまな分析を行ってきた。しかし、そのような分析に対し、データの「信憑性」という観点から疑義が出されている。曰く、実際の相互行為パターンと調査対象者の社会的ネットワークの自己申告結果が必ずしも一致しない、等々。そのような批判に対して、社会的ネットワークの申告結果は状況的な行動パターンよりもより継続的な行動パターンを反映しやすいとか、あるいは、組織の下位にいる者は、上位者との関係を、上位者が評価する以上に、重大なものとして受け取る傾向にある、といったテーゼに代表されるような、組織的な自己申告のゆがみのパターンを追求する方向へ解答を求めようとする論者もいるが、未だ決定的な解決をみていない。それに対し、Krackhardtは、そういった方向性は必ずしも生産的ではないと判断し、その対案として、回答者自身の持つ、意識され、認知されたネットワークをそれ自体として研究していく意義ないしは分析方法について検討することを提案したのである。

(4) 本データは、山田由香子氏（現国際基督教大学高等学校）のご尽力により収集されたものである。

(5) Recharids and Rice(1981)。また、Rogers and Kincaid(1981), chap 4参照。

(6) Wellman and Berkowitz(1988)は、構造分析(Structrural Analysis)あるいは、構造主義、という用語を社会ネットワーク分析の含む方法論の総称として使用している。

(7) 1992年3月の第13回数理社会学会大会での山岸俊男氏の報告。

(8) たとえ、社会ネットワークの構成員が自身の属するネットワークに関する認知マップを初期値として持っていなかったとしても、とりわけ継続的な取引行為などの場合、研究者によってのみ与えられる「客観的」な構造が直接に当該行為者

の行為や行為結果に一定の影響を与えると考えるよりも、継続的に当該ネットワークの中で行為を行っていくうちに自分なりの認知マップや認知モデルを、第3者との関係を通じて構成し、それに基づいて、一定の効果が発生すると考えたほうが自然であらうし、また現実的には何の認知マップも持たずに行為する行為者は、考えるににくいことから、「客観的」な構造効果よりも後者の構造効果のほうが大きな影響を与えているのではないだろうか。もっとも、その際当該行為者がどの程度見通しを持って、言い換えると、完全情報を持ちえた上で行為可能なのかは、論議の余地があるが。

(9) 大西(1989)参照。

2 認知社会ネットワークの発想の展開

以上認知社会ネットワーク分析の社会ネットワーク分析上の位置付けについて展開してきた。しかし、認知社会ネットワーク概念の射程は上のような意義に留まらないのではないか。いうならば、社会認知のパラダイム転換にまで結び付いていく可能性を秘めているように思われるのである。以下その点について論じてみよう。

まず、認知社会ネットワークが提起している問題は、次の2つに分けて考えることができると思われる。

1) 社会学における新たな主体像の提起。ならびにそこから演繹される、社会システム論の問題。

2) 社会学における研究者と対象(者)との関係。あるいは、社会学の認識論の問題。

2. 1 認知社会ネットワークが提起する主体像とその展開⁽¹⁾

社会学の主体像の転換

認知社会ネットワークで扱われる人間像とはいったい何なのだろうか。またそれは、社会学にとってどのような意味を持ってくるのであろうか。

先に、認知社会ネットワークで問題にする主体は、間接性の中で、絶えず状況化される中で認知マップを構成する主体だと述べた。このような主体は、状況に対して常にコンテキスト付けを試みているのである。例えば、我々が迷路の中にいると仮定しよう。この時、最初我々は、迷路の地図も持っておらずどのように抜け出たら良いか方法論も持っていない。このような中で、一つ一つの通路を確かめ確かめ、手探りで出口を探らざるをえない。その様な試行錯誤の後に、その迷路の全体状況を把握していき、2回目には、比較的困難なく通り抜けることができる。迷路の全体状況を把握するということは、迷路の背景（全体コンテキスト）を把握するということである。具体的には、迷路の規則性を把握するとか、迷路の全体の地図を頭の中で構成してみるといったことである。しかし、それらの情報は、地図を直接見るように直接把握することはできない。個々の迷路の状況から、情報の縮約、再編成を行いながら構成していかなくてはならない。

同様なことを生活者としての我々は、日頃の社会関係の中で行ってきたのである。コンテキストを理解することなしには、我々は不安、不確実性を解消することはできない。また、コンテキストが存在しなければ、認知も困難であろう。いうならば、主体の持つ認知マップとは、主体にとっての状況モデルなのであって、それによって不確実性を縮減していくと同時に、それに基づいて一定の戦略を組み立てる、いわば、前戦略認知なのである。これは、ちょうど研究者が、なんらかのモデルなしには、アドホックな（要するにあてずっぽうな）ことしか言い得ないのと同じであろう。

しかし、一旦コンテキストが見えてきて不確実性が縮減されても、今度は、別の新たな不安が生じてくる。このようにして、主体は、不確実な状況＝環境と向き合っているのであり、環境への対応とは、このような次々と来る不断の新たな不安への対応の連鎖である。なぜならば、本来環境とは、システム外の不確実性のことなのであるから。環境は、不確実性が縮減された時点で環境ではなくなりシステムに取り込まれる（完全にシステム内部に取り込まれないでも、内環境ないし外システムとなる）。そしてその外に別の環境が広がるのである。

このような認知マップ、状況モデルを組み立てる主体とは、「戦略家」である。すなわち、単に自己の意図のみで投企する主体ではなくて、状況を把握するとともに間接性の中で、相手の意図、出方を探り、自分の投企の結果を予測するそう

いった存在である。そこに、戦略の相手の意図と自分の意図との多重包含関係が成立し、そこに、戦略の多次性が存在する。つまり、最初の手がだめであれば、次の手を用意するといった具合である。そして、認知マップとは、具体的な戦略、戦術がくる前の前戦略認知となる。従って、全体認知マップには、相手の意図を包含した、相手の全体認知マップを予期した自己の全体認知マップ、更には、自己の認知マップを包含した相手の認知マップを包含した自己認知マップ・・・というように数次にわたる多重包含認知マップが想定されるであろう。

それにもかかわらず、実際に主体が投企するとき、往々にして、予期とは異なった行為に出ることがある。(12)

それに対し、従来の主体像は、主体が役割規範に縛られる側面と、その一方で、役割規範から逸脱し状況化していく側面を統一して捉えることに失敗した。また、主体の状況把握も、すでに述べたように、せいぜい局地マップ（例えば、1次スターネットワーク）止まりであり、全体認知は抽象的全体像でしかない。また、その自己制御は限定的である。このため、ミクロとマクロの間に大きな断絶を設定することにもなる。なぜならば、ミクロ（各主体）と、マクロ（全体）を橋渡しするしくみがモデルに内包されていないため、ミクロは、一方的にマクロに制約されるか、ミクロとマクロは分析上かわりを持たないか、あるいはマクロに予定調和的に一致していくかのいずれかにならざるをえない。そのために、社会システム論では、単一の調整主体を設定するサイバネティックなシステムを指定せざるを得ない側面が存在する。

とはいえ、社会ネットワーク分析に代表される構造分析は、構造情報を分析に取り入れることによりミクロマクロの橋渡しを試みてきたし、一定の有効性を発揮した。しかし、それでもなお、主体を十分に位置付けてきたとはいえないだろう。

それに対し、「戦略家」モデルでは全体マップを有しているという意味で、全体を内包する個であるといえよう。そういった意味で、ミクロマクロの橋渡しにより可能性を持つモデルだといえはしないだろうか。

システムモデルの転換

このように考えていくと、このような新たな主体像に対応するシステム論を考

えておく必要があるだろう。

先にふれたように、従来の主体像に対応するシステム論は、サイバネティック（単一制御主体）モデルであった。これは、単一制御者が「環境」変動や内部矛盾を調整制御するモデルである。しかし、サイバネティックモデルは、まったく変動を受け付けない、剛構造のシステム（あるいは、抽象度が高い誇大システム）に比較すれば、変動を受け付ける柔構造のシステム論という意味で、より進歩的である。しかし、その場合でも環境要素を予めシステム内に内包せざるをえない。つまり、予め予測プログラミングされた変動範囲内での環境変動には、対応可能なモデルなのである。しかしそれは、本来の意味で「環境」なのか。環境は、研究者に気付かれたときから「顕在化」し、システム理論の一部にとりこまれてしまう。そこでは、「環境」は内環境ないしは、外システムと呼ぶべきである。まったく不確定の環境 — それは、研究者さえ認知できない — に対して対応しうるのか。あるいは、研究者さえ認知できない環境を取り込んだシステムが考え得るのか。そこに、今日の自己組織性論のアポリアがある。それらに対し、システム論から、メタシステム論、分析からメタ分析へと取り敢えず回避する方向も考えうるが、しかしそれらも抜本的な解決策ではないように思われる。

サイバネティックなシステム論に対し、それとは別のシステム論が構想しうる。それがシナジェティックモデル（複主体モデル）である。

単一制御主体をたてるサイバネモデルにたいして、シナジェティックモデルとはシステムを構成するそれぞれの個が、揺らぎ（例えば、行為の）を持つモデルである。個の揺らぎは、一定のパターンを持ち、その限定されたパターンの確率論的分布によって全体システムのパターンが表出する。元来社会科学のモデルではなく、自然科学系のモデルであり、複主体という発想は社会科学のなかでもアナログカルに受け入れ可能であるにせよ、単独で社会学のシステムモデルとして採用しようというのは無理がある。そこで、黒石(1991)は、リゾームシステムへと向かう。

リゾームシステムは、いわば、サイバネティックモデルと、シナジェティックモデルの中間である。黒石(1991)によると、リゾームとは、互換可能であるそれぞれの個が（部分が）、結び付き合い、ネットワークを構成し、それらが環境の変化に応じて、システム（le corps sans orgues無器官体＝機能分化／特化して

いないシステム)の中を遊動し、結び付きを柔軟に変化させるイメージを立てている。ここでは、個が特化していないがゆえに、個にとって戦略が重要になってくる。

ここでは、複主体たる個は状況をモニターし、それに基づいて結果を先取り予測し、戦略を立てる。この時、各々の個は、全体の見取り図を彼らなりに持った主体である。いわば、全体を取り込んだ個のモデルである。このような全体マップを持つ複主体が相互行為を行いつつネットワークを形成し、相互に調整をしよう相互調整主体となって一定のシステムを維持し、あるいは変化させていく。そういった、このような相互調整複主体たる個は、まさに社会認知ネットワークでモデルとしている主体として表現できる可能性がある。

この時、システムの要素として、情報—資源、規範—価値といったものが考えられるが、認知マップにまず着目するというのは、まず情報に着目するということになる。これは他の要因を捨象するというのではない。主体像として戦略家を立てるがゆえに、第一要因として、情報に着目するのである。

2. 2 認知社会ネットワーク分析が提起する研究者の認識論の問題

すでに上記の論述の中で気付かれたであろうが、認知社会ネットワーク分析は、改めて研究者と対象(者)との関係について問題を提起する。

従来の社会ネットワークの研究が客観主義的であったとするならば、それは、研究者が特権的な地位を占めているという意味においてであった。その場合、対象はあくまで客体であった。構造分析=社会ネットワーク分析が、属性から構造情報へとその説明変数を転換してきたことにより、研究者の恣意性を減じようと試みてきたにもかかわらず、依然研究者の視点が、特権的な位置にあるということ自体は変わってこなかった。個々において、客観性は、研究者が認定するのであった。Krackhardtの試みも、共通認知ネットワークを認定する過程で、依然かかる特権性を踏襲したのであった。

しかし、認知社会ネットワークに今まで述べてきた位置付けを与えるならば、客観性概念をシフトさせていかななくてはならない。この中で、研究者は、対象者と同じ位置付けを与えられるべきであろう。そこにおいて客観性とは、各人の認

知マップの相違を認める以上もはや全員に共通な共同主観性などは指定し得ないのだから、例えば、その社会の中で最も有効な戦略を立て得たものが客観的に認定される、といったことも考えられるであろう。そこにおいては、理論自体も、環境の変化に応じて、自己組織化が求められるといった事態も予想されよう。

いずれにせよ研究者にとっての認識論のパラダイム変換が求められているのである。

(注)

(1) 以下の議論は、高橋和宏都立大学助教授を始め、高橋研究室の学生大学院生諸君との議論に多くを負っている。にもかかわらず本稿がそれらの議論をいかせていないとすればそれは総て筆者の責任である。

(2) 高橋（他）(1990)は、これを保有体、実現体のずれであると指摘した。

文献

平松 闕 編(1990)社会ネットワーク, 福村出版

Krackhardt, D (1987) "Cognitive Social Structure" *Social Networks* 9.109-134

黒石 晋(1991) システム社会学, ハーベスト社

Mead, G H. (1934) *Mind, Self, Society*, 邦訳 稲葉三千雄（他）訳, 精神、自我、社会, 青木書店

大西康雄(1989)構造分析とカテゴリー分析の統合を目指して、第62回日本社会学会大会レジュメ

Richards, W D and Rice, R E (1981) "The NEGOPY network analysis program" *Social Networks* 3 215-305

Rogers, E M and Kincaid, D L (1981) *Communication Network: Toward a New Paradigm for Research*, Free Press

高橋和宏、大西康雄、山口洋(1990)社会的ネットワーク分析の方法論的再構成, 人文学報 219, 45-62

Wellman, B and Berkowitz, S D (eds) (1988) *Social Structures: A Network Approach*, Cambridge Univ Press

(おおにし やすお／山梨県立女子短期大学)